

農政産業観光委員会 県内調査活動状況

- 1 調査日 令和6年11月7日(木)
- 2 出席委員(7名)
委員長 長澤 健
副委員長 渡辺 大喜
委員 飯島 力男 菅野 幹子 白壁 賢一 志村 毅
- 3 欠席委員 河西 敏郎 山田 一功 土橋 亨
- 4 調査先及び調査内容

(1) 意見交換会

- ① 出席者 身延町あけぼの大豆振興協議会の会員の方々
- ② 内 容 「地域農業の現状と課題について」

○主な意見

委員) 高齢化や作る人が少ないという話があったが、だいたい1反を3か月かけてあけぼの大豆を作ると収入はどのぐらいか。

出席者) 大豆に関しては、例年10アールあたり200キロ程度の収量があれば良いところなので、キロ単価1,000円として計算すると20万円。枝豆に関しては、10アール当たり400キロ程度の収量があり、キロ単価が2,000円として、70万円から80万円になる。

委員) あけぼの大豆を本格的にやって、それで農家の方が農業だけで本当に年間生活できるかということも、これからは大事だと思う。大豆は、生で食べる以外にも加工品でいろいろと工夫ができると思う。温暖化が進み、作り方も変わり、今年はカメムシの影響もあったと思う。あけぼの大豆を生産するには大変な点も多いと思うので、機械化などできる方法を考えていくことも必要ではないか。

出席者) 私は1町5反ほどであけぼの大豆を生産しているが、北海道のような大きいところみたいな機械化はやはり難しい。

あけぼの大豆は生産量が少なく高価なものになっている。今、種600キロを約350戸で生産しているが、生産量をこれ以上増やすと、多分クオリティが悪くなってくる。今300グラムで700円ぐらいで売っているが、それが1,000円、2,000円で売れるように、クオリティを上げて、高価だけでもおいしいからあけぼの大豆を買

おうとなるような方向で販売していく方がよいと思っている。現に、町内で大きくやっている企業でクオリティが下がってクレームが多いようなところも出てきている。JAでも、遊休農地の受託管理を考えており、うちの会社でも遊休農地を受託して、農作業員を動かして手伝っていくという方向が現実的かなと思う。

山間地で急斜面なので大規模な機械化が難しいというのが、あけぼの大豆の生産の現状だと思う。

委員) 山間部でなかなか機械化が難しいということで、単価を上げて、希少価値を高めるというのも1つの方法と思った。

子育て世帯などの若い方は、農家としてはいるのか。子育て世代が子供を育てられるような収入があるのか。

出席者) あけぼの大豆は単価が高いという状態でも、収量をかけて計算してもらえば分かるように普通のサラリーマンの年収には到底及ばないのが現状。やはり若い人たちを巻き込んでいくには、このあけぼの大豆を栽培して生計を立てていけるような収入がなければ続かないと思う。自分が目指してるのは、その先駆者になって、自分で作って加工して、こういうやり方をすれば生活できるというものを見せられればいいなと思ってこの町で頑張っているところだが、なかなか専業農家で生計を立てているという人はいない。30代ぐらいの方で兼業でやっている方はいるが、農業の収入だけで生活というのはかなり厳しい状態。

委員) 先ほどの土寄せも、手押しの一輪車だったり、いろいろな作業がある。平らなところならば良いが、高さがあったり傾斜があったり、非常に苦労がある。それに見合う収入があれば、若い人たちが営農してくれる可能性が非常に高いと思う。

どちらがいいとか悪いという話ではないが、宮城県のずんだ餅は冷凍にして加工して1年中売っていたり、山形県の酒田市にはただちや豆があって、ずんだ餅の真似をしたり、豆腐と味噌、納豆などの系統で年間を通して稼いでいる。そういう形にすると、年間通して若い人たちが今よりも稼げるような、高収入な農業につながっていく。そういったことが地域おこしでできると若い人たちが来て高齢化対策にもなると思う。味噌ばかりではなく、製品的なものをもっと掘り下げるというのはいかがか。

出席者) 加工品については、あけぼの大豆拠点施設を町で建て発足したときに、有名なシェフに相談した。JAで枝豆に選別して、そこから落ちたものをゆでて、むいて、むき豆にしている。枝豆の重さで2トンゆでて、むき豆になると1トンになる。加工品としてはシューマイや塩麴などがあり、大体1年ぐらい賞味できる。

実は大手企業から、500キロほしいという要望があったが、大量発注にはうちとしても応えられない。10トン20トン生産すれば、それが供給できるかというと、高齢化や農地面積の関係でできない。今、身延町の栽培規模でやっていると、加工品はこのぐら

いというところで推移している。

ただ、先ほどの数字は、J Aに共選で出している数字。J Aに出さなくてもJ Aに出しているのと同じぐらい直接ネットで販売している人もいるので、規模としては、枝豆で出している量は、J Aの倍ぐらいは生産してると思う。ただ、やはりそれだけで生活ができるかという点と難しい。

だだちゃ豆の話があったが、だだちゃ豆は品種ではない。5種類ぐらいの品種を2か月ぐらいかけてどんどん生産するから、あけぼの大豆の何十倍、何百倍生産できる。あけぼの大豆は10月の1か月しか収穫できず、大量生産は厳しい。先ほどG Iの話があったが、あけぼの大豆としてG Iマークの使用が認められるのは、あけぼの地区で生産された種を、身延町内で作ったものだけである。大量の商品を作って販売して、利益を得るのには、現状では少し厳しいと思うので、量ではなくて価格で頑張って収益を上げた方がよいのかなという考えでやっている。

委員) あけぼの大豆をネットで見ると、申込みをして、指定の日付に買いに行かなければならないとなっている。そのような形で売ること、品質や値段を管理しているのだとは思いますが、もっと気軽にその辺のお店で売っていれば、そこに買いに行きたいというのがある。

ネットでも買えるようだが、日にちがかかってしまい品質は落ちないのか。

出席者) 自分はネットで販売しているが、採ったその日に出荷して、その日中に新鮮な形でお客様の手元に届くように、まさに産地直送ができるような形で出している。J Aだと、出荷したものを選定して次の日にお店に並べることになり、直送より日にち的にロス。自分の作ったものはそういう付加価値のつけ方をして販売している。

委員) 申込みをして指定の日になんか買いに行くより良いと思う。

ただ、先ほど言ったように量に走ると品質が落ちてしまう。この地区でできたものをあけぼの大豆として売ることだと思うが、中には、不正をする人がでてくる。申込制で売ると、そういったことの管理ができるということか。

できれば量も出していただいて値段を上げていただく、そしてメジャーになっていただければ、過疎化対策にもなると思う。地域の特産をもっと育てていくために、県でも支援策を考えてもらいたい。

出席者) 品質を落とさないような売り方として、〇〇さんは、できるだけ早く郵送する形をとっているという話だが、自分は対面販売という形で売っている。予約を受けたお客さんが、うちにきて、うちで摘んだ枝豆をその場で袋詰めをしてお客さんに手渡している。そうすると客の顔も分かるし、生産者の顔も分かるし、渡すときに、品質が悪いものを入れて渡せば、すぐに分かる。品質を落とさず、効果を上げるような形でやるにはそれが一番信頼を得る方法だと思っている。身延町で実施しているあけぼの大豆フェアでも、

そのような形で販売しており、うちの会場は年々客が増えている。一度信頼を落とすと、もう二度とその客は来てくれないと思うので、生産者はそのようなことのないように取り組んでいかなければならないが、どうしてもその中で、品質の悪いものが出回ってしまうということがあります、今、私達の振興協議会の中では、問題点の1つになっている。

旧中富地区では、畑が細かく区切られていて、畑面積が非常に小さい。それを統合して大規模な農地にならないと、生産性は上がっていかないと思う。実際に私の隣で畑を耕作してる人は東京から厚生労働省をやめて、農業をするために来た人。その人と話をしても、やはり畑が少ない、もっと広く耕作をしたいと言っている。都心の方からも、農家をしたいという人もだんだん増えているような状況なので、受け入れる側の状況の方を変えていかない限りは、迎え入れることができないと思う。来たくても来られない状況になるのはもったいないと考えている。

委員) 新鮮なものをネット販売するやり方もお客さんに喜ばれるし、フェース・トゥ・フェースでの売り方もリピーターが増えている。2つの売り方があるということか。

県には農地の集約化の補助金や土地改良事業の補助金もある。だから地主にも力を貸していただき、そのような要望をまとめていただければ、集約可能な小さい畑を大規模なものにしたり、機械化できるようにしたり、段々畑があれば、土地改良事業もあるので、県に相談していただければ、解決策がある。

委員) 私も農業を30年以上やっているのですが、皆さんのお話を聞きながら非常にイメージができた。びっくりしたのは、身延町が合併して人口1万7,000人台だったのが、今は1万人を切っているということ。これは、365日毎日1人ずついなくなっている計算になる。あけぼの大豆は推計30トンとは言われているが、担い手も数少ない中で、農業だけでやってくのはまず難しいだろうなと正直感じた。

大豆は日本人の食生活の中で一番基本で、当然味噌など、みんな食べているが、非常に関心が低いというか、当たり前にあると思っている。このような中で、あけぼの大豆をブランディングして、少量で高付加価値をつけ、高単価で売っていこうという選択をする以上はやはり外にアピールしていくことが非常に大事だと思う。あけぼの大豆をきっかけにこの地域に来てもらい、あけぼの大豆を食べてもらい、できれば栽培に触れてもらい、あるいは峡南地域に来て他の身延町以外の農産物も含めて、この地域を周遊してもらう中で、専業でやるのはなかなか難しいかもしれないが、あけぼの大豆を生産している農家の方々が兼業でも農業を続けていけるということを考えていくのが非常に大事だと思う。

地域計画に基づいて、農地を団地化して整備していく、機器の補助をしていくというためには認定農業者の仕組みが必要だったり、なかなか大変だと思うが、年齢は60歳代でも70歳代でも、生涯現役でできるのが農業。このような状況で皆様が続けていくためにできることは、かなり手を尽くしていると思うので、私たちもそういう部分でサポートできるのは限りがあるなと思いながら聞いたが、半農半Xとよく言われるように

農業しながら他のことができる身延町であれば、人がきっと選んでくれるだろうし、中部横断道が通ったこともあり、ブランド化されているというG Iもある。そういうことも含めて応援していきたい。



※意見交換会の様子

(2) 【電気事業】 早川水系発電管理事務所

早川町役場大会議室にて事業の概要説明を受けた後、早川水系発電管理事務所にて、事務所内をめぐりながら説明を受け、質疑を行った。



※ 概要説明を受けた後、早川水系発電管理事務所を視察した。